

パネリスト（石原義剛 氏）

ご紹介いただきました石原です。はるばる三重県鳥羽からお招きいただきましてありがとうございます。あまりお役に立つようなお話はできないと思いますが、40年ほど博物館屋をやっており、そういう中で当地とも親しくお付き合いができる仲になりましたのでお呼びいただいたというふうに思っております。私の博物館は鳥羽とってお分かりでない方、志摩半島のほとんど先端部分です。平成25年に伊勢神宮の20年に一度のご遷宮があり、おいでになられたときにはぜひお立ち寄りいただきたいと思っております。

さて、うちには全部で日本中の木造船が86隻ほどあるのですが、その中に大崎上島のものが3隻あります。これが今まで一つずつご縁をつくってきたわけですが、最初のきっかけはこの権伝馬の皆さんに、私たち鳥羽市の若い職員が権伝馬を教えていただいたことです。これは因島で権伝馬の大会があったときに参加して、それから教を請うたという経緯があり、そういう中でお付き合いがはじまりました。そして彼らから素晴らしい権伝馬があると聞いたとき、最初は本当かなと思いました。今、ご紹介いただきましたが、平成16年に熊野古道は世界遺産に登録されました。正確には紀伊山地の霊場と参詣道という名前ですが、山地というから山の中かと思われそうですが那智大社というのがあります。これは海に面してほぼ近いところの那智の滝。さらに北のほうへ行きますと熊野速玉大社というのがあります。ここに数百年続いた素晴らしい権伝馬があります。9隻の早舟が熊野川の河口から約2キロ上流の島まで競争をするという大神事があります。それを知っていたものですから。さっそくこの東野へ寄せていただき、この権伝馬に感動しました。速玉大社の場合は9隻の舟がそれぞれ1回競い合うのですが、こちらの場合はそれぞれの集落の皆さんが非常にまとまった結束をもち、高度な技術をもって権伝馬を伝承していらっしやいます。ところが最初におじやました6年か7年前ででしょうか、その権伝馬が1箇所2箇所と無くなっていくということをお聞きしたとき、博物館というのは古い伝統的な道具を集積していくということが役割ですから、その中にぜひこの権伝馬を残しておきたいと思いました。どなたか忘れましたが、地域の権伝馬の世話役の方に、この舟を1隻、無くなる地区があったらくださいと申し上げました。だいぶ時間が経った後だったでしょうか下さるということになりました。最初は大変むずかしいということでした。東野の場合は住吉神社の神事としても行われているし、舟というものをものすごく大事にしているから、なかなか外に出すのは無理ですよと言われてきていたのですが、結果としてそれをいただくことが出来ました。ここにも何人か私どもの博物館へおいでいただいた方がいらっしやると思うのですが、その舟には50000という番号がつけてあります。私のところではいただいた資料を1番から全部順番に番号をふっております。私は50000という番号をその舟につけました。その近くまで資料が集まっていたということもあるのですが、先ほど谷川さんのお話にもでてきましたが、私は40年ほど前に海の博物館を作るとき、これは海の文化を残そうということを基本にして博物館作りを始めたのですが、宮本常一先生にご相談にあがったことがありました。「博物館というのは基本的になんです

か？どうすればいいのですか？」とお話をしていたら宮本先生は「物というものをしっかりと集めておく。それはいろんな種類の物が集まっても、同じ物でもあるいはどんなものでもいい。五万点集めると、いつかものが見えてきます。見える世界がかならずあります」ということを教えていただきました。そのひと言でわき目も振らずにやってきて、はっとこの樫伝馬をいただいたときに「これに50000目の番号をつけよう」と思い、50000という番号をつけさせていただきました。それからそのあと「さんまい」という一間たらずのちいさな舟がもう1隻収蔵されています。これは今日おいでになっていると思いますが、元樋造船の社長さんとお話をしていたときに「私たち子どものころには、この島が船の島だから、みんなあのちいさな船を作って、乗っているんだよ。これである意味船乗りになっている。1番最初の体験をする船だ」という話を聞いて、「これもくださいよ」と言ったら、それから数ヵ月後に多分手作りで作っていただいたのだと思いますが、送られてきて収蔵されています。

もう1隻あります。それは2年ほど前になりますから、皆さんご記憶があるかもわかりませんが、明石の西さん方からいただいた「槇皮（マキハダ）船」です。ちょうど私は日本における木造船の船大工の調査を全国的にしておりまして、船大工さんが無くなっていく原因をいろいろ調べてこの辺をかなり丹念に歩いたのです。木造船が無くなっていくのはもちろん需要がなくなるわけですが、あるいは舟の水を止めるためのまきはだというようなものが無くなっていくとか、船作りのもっていた周辺の技術もみな無くなっていくということを知って、まきはだを訊ねて行き着いたのが西さんでした。そしてお話をしたらあそこに機帆船がどんと乗っかっていて、これもいろいろ聞いていくともう木造の機帆船というのはこの広い瀬戸内海の中でたぶんこれ一杯しかないでしょうというお話でした。これ大変なのです。20メートル以上あってでかいんです。こんなの陸送ではとてもできません。なんとか残して欲しい、保存していかなくてはいけないと思って東野の何人かの人に「これ東野に残しておきましょう」と申し上げたのです。しかし、結果的にはこの船は私の博物館へ来たわけです。ただ歴史的には確かにマキハダを積んで、船具を積んで、まきはだ船は瀬戸内海一円を何十年も航海をし続けてきた。たぶんその先輩もいっぱいいたのでしょう、そしてここにたくさん各地の情報を持ち込んできた。まきはだなんてそのものは奈良県から来るわけです。そういう陸とのつながりも作ってきたという経過があるわけですが、私がどうしてもこの船をいただこう、もらおう、うちで保存しようと思ったのはそういうことではないのです。ほぼ干上がった船底のマキハダ船の上で西さんご夫妻とお話をしていたとき「私はこの船の上で子どもを産んで子どもを育てたんですよ。子どもとっしょに夫婦でこの船で瀬戸内海を航海したんですよ。この船のエンジンを子どものようにかわいがって直しながら働いたんですよ」そういう一つの人、船、人間のつながり、基本的に一つの例でありますけれども、この地域の人たちが愛している船、海というものをちょうだいしようと思いました。たぶんこういうことがこの地域でも、これから一つひとつ、もう一度くり返し語り継がれながら新しい時代へ引き継がれていくような、

そういう地域文化の再発掘というあり方をたぶん皆さんお考えいただくといいのだろうと思います。今、皆さんの中にももう一度ものを集めたり、当地の歴史を再発見したりしようというような動きをたくさんされていると思います。基本的には今各地で、特に海岸ベリの海村、漁村は非常に高齢化とか過疎化とか少子化の中で悩んでいるわけでありませうけれども、まだまだそこには培ってきた海の伝統というようなものが残っているというふうには私は思っております。特に權伝馬のように一つの共同体といいますか、皆さんが寄り合っていてそして技術を伝承していく、その世界というものがきっちりとまだ残っている。これから壊れそうなのかもしれませんが、まだ今なら大丈夫、そういう時期なのではないかなと考えております。

最初に、松浦会長がおっしゃった伝統っていうのはやはり少しずつ変わっていく。あるいは伝統の中に新しいものが入っていかねばいけない。さっきの中学生の皆さんもそういうことを彼らのことばで言っているのだろうと思います。どういうふうにして權伝馬というものを考えながら、伝統を引き継ぎながら新しい方向へもっていくか。そういうところを町の皆さん、島の皆さんが語り合っていて進んでいく、やっていく。地域の皆さんで語り合っていてやっていくというところが大切なのではないかと思います。

コーディネーター（谷川正芳 氏）

ありがとうございました。皆さん、石原館長のやさしいおことばの中に熱いものを、また愛ということばの重みを秘められたと感じられたと思います。館長さんは熊野灘をこよなく愛する中に、この大崎上島の先ほど3隻の船を大変愛していただいて、先におたずねしたときも、大変丁寧にその船を守っていただいております。地元の者としては申しわけないという気持ちになったことがつい先日のことでございました。

続いて実は森本様、石原館長も宮本常一さんとおっしゃいましたけれども、宮本常一さんの愛弟子でいらっしゃいます。

そして最初に申し上げましたように本で紹介します。

森本孝さんの著書で『舟と港のある風景』（会場に見えるように）

日本の漁村・あるくみるきく。ほんとうに美しい日本の海とそこに生きる人々の姿がここにある。

ということで、森本さんは、最初の紹介にありました「海外漁業コンサルタント」として、日本だけでなく世界の海と船をみてこられています。そういう意味で森本様、引き続き第二番手ということでお話をいただければと思います。よろしく願いいたします。